



『トクシマ・アンツアイガー』

第4号

徳島 1915年4月25日



中将フォン・シュペー伯爵†

戦時中のドイツの食料（2）

どうしてこのような農業生産の上昇が可能だったのかと、いろいろな人から尋ねられた。簡単にお答えしておこう。残念だがここではきちんとした数値での立証はできないが、後にそうするつもりである。

今日農業によって耕地化された面積は 1870 年より多くなっているが、この事実は決定的な理由とみなされてはならず、こうした成果の源泉は何よりもよりよい土地の活用に求めなければならない。化学と技術がわれわれの農業に、同じ土地でも以前よりはるかに高い収穫を得ることのできる手段を与えてくれた。ドイツでは今日、地上のどの国よりも単位面積当たりの大きな収穫を上げている。よりよい肥料・さまざまな化学肥料の活用・土地改良・栽培果実の種類により適切な転換は、これらの成果のお陰をこうむっている手段のいくつかである。

パン用の穀物としては何よりも小麦が、しかもことにロシアから輸入されてきていた。もちろんこの国は戦争が始まるとすぐに食料品の輸出禁止に踏み切ったので、これまで輸入されていた小麦はわれわれの市場に入らなくなった。同じく目下はこうした欠如をアメリカで補うことはできない。もちろん今でも、われわれは必需品の一部をルーマニアから買ってきた。しかしともかくドイツでの小麦の不足ははっきりしている。にもかかわらずドイツは、どうやって国民の食料を確保できたのだろう。

戦争勃発に伴う最初の命令の一つは、これまで徴集してくれていた税を中止するとともにあらゆる食料品の輸出を禁止することだった。もちろんわれわれはこれまでスイスに必要な食料供給を保証してきたが、これは自国での食糧不足が予測されていなかったことの十分な証拠である。

こうした禁止はただちに、われわれのライ麦と砂糖の輸出中止という形で返ってきた。したがって足りない小麦の代わりに、大量のライ麦をパン作りに振り向けなければならなかった。そのうえアルコールとビール作りが制限されたので、たくさんのジャガイモと大麦が食用に回されることに

なった。

政府はできるだけ早くあらゆる穀物の在庫を確保し、それぞれの種類の穀物を月ごとに十分使えるような状態にした。そのうえパンを焼く際に他の穀物の粉を混ぜるようという指示も出された。そうすることで、小麦とライ麦とジャガイモをきっちり固めた「K」パンつまり戦争パンと呼ばれるクッキーが生まれた。

この「K」パンは、今ではもっとも貧しい人の食卓にも皇帝の食卓にもものっている。それはシュレースヴィヒでもバイエルン・アルプスでも、アルザスでも東プロイセンでも同じである。

米などに関しても確かに適当な代用品が探された。もちろん香辛料や類似の高価な品はイタリア越えの陸路から輸入されたが、その際これらのものにかかる輸送経費はさしたることはなかった。

けれども人はパンだけで生きているわけではない。肉の供給に関しても備えが必要で、ドイツでの家畜の保有量は開戦当時より多いわけではない。この点では、平時にもわが国がたくさんの屠殺用の家畜を買っていたデンマークからの輸入が可能である。

けれども結局は食料があるかどうかではなく、それとともに大事なのはみんなが適切な値段で買えるかどうかである。この点についても政府は賢明な予測を立てていた。最も重要な食料品・光熱材に関しては最高値が取り決められており、平時よりは上がっているにしても比較的lowめに設定されている。

もちろんパンなどを買う金のないすべての人には、食料が無償で提供されるように配慮されている。国の援助だけでなく、都市や地方の経済的弱者には支援が行われている。

故国で、これまで以上に増えている大きな私的な援助については触れないことにする。はっきり言えるが今回の戦時のドイツでは、これまでの平時よりも困窮度は低い。もちろん1万の上流階級と中産階級は、生活の仕方をきつく制限しなけりばならなかった。なぜなら今日ではもはや家の机

の上にある財布が問題ではなく、貧富に関わりなく人数あたりで同じ配給がなされており、今のところ政府のすばらしい処置のお陰でみんなが満足しているからである。

1915年の収穫はどうなるのだろうか？もちろん一番の問題は労働力の確保である。周知の通りことに東エルベでのわれわれの収穫作業は、収穫時にだけドイツにやってくる「季節」労働者、つまりプロイセン・スロヴァキア・クロアチアなどの農業労働者によって担われてきた。これらの労働力は今では、おそらくゼロではないにしてもほとんど大部分が失われている。そのうえ、何10万もの農民や農業労働者が戦場に取られている。

労働の大部分は婦人の肩にかかっている。それでも、戦争のため仕事が制限されている産業労働者が農業にたずさわっている。さらに数多くのわれわれの俘虜、ことにロシア人がこれらの労働に従事してくれている。

種まきは支障なく行われ、収穫物の取り入れと必要な共同作業のための労働力もたっぷりある。したがって種まきの天候に恵まれさえすれば、確実に今年の必要な収穫は完全に達成できよう。いやそれどころか、これまで砂糖大根を植えていた広い肥沃な畑が今は穀物やジャガイモに回されているので、状況は昨年よりもさらによくなっている。砂糖は輸出が禁止されたため今年の分が貯蔵できよう。いくつもの休閑地や観賞用の庭園や公園もきっと耕やされ、自分自身をつまら「ドイツの大地」を守るために、応分の貢献をすることになるろう。

日本の歴史（3）

日本と中国の間ではこの頃すでに友好的な関係ができあがっていて、両宮廷は絶えず高価な贈り物をたずさえた使節団を交換していた。中国の年代記によると、最初の日本の使節団は西暦57年から始まっている。その

頃はまだ中国との交通は韓国経由で、当時の原始的な輸送手段からするととても困難で、長い間をおいてしか使節団は往き来できなかったが、3世紀からは活発になり、ことに価値ある金属製品やそれに役立つ素材が贈り物として持参された。日本人の韓国所有地の大部分は560年頃には失われた。日本とじかに向かい合っている部分だけがまだその支配下に残っていた。

日本の国家間の結びつきは、5世紀でもまだとても緩やかだった。民族はいくつかの「氏」からできているが、「氏」は言葉の広い意味での一族や家族と考えてよかろう。同じ先祖からの血縁とそれに伴う同じ祖先崇拜が、「氏」に属する世襲の首長の下にある個々の支族にとって統一の絆だった。「氏」は、5つの階級に分けられていた。一番低い階級は「とものつか」で、ある生業に従事したいいは韓国と中国からの移民の系列だった。次のいくらか高いランクの階級は農耕地を所有している人々で、「るにつこ」や「造」^{みやつこ}だった。その上に「連」^{むらじ}と「臣」^{おみ}が続き、特殊な政治的・社会的な特権をもっており、古代日本の貴族とされていた。2つの一族は同じランクとされたが血統で区別された。「連」は、九州から征服を始め本州に押し入った神武天皇に従ってきた者の子孫である。「臣」は天から下ってきた神々という素性を引き出し、第5階級を形作っている皇室の縁戚とみなされた。「連」も「臣」もいつも「氏」を、「氏」の部下である支脈の「氏」つまり「小氏」の頂点として受け継いできたのである。天皇はもともと、自分自身の「氏」の内部でだけ実質的に支配した。天皇には後に、外部との交流の仲介とそれに伴う戦争か平和かという決断が課せられた。さらに天皇は「氏」どうしの争いを調停し、祖先神つまり太陽神天照大神の前での「氏」の代表となった。「連」「臣」の首長は、「大連」「大臣」という肩書きを持った。こうした肩書きは当初は高い位を意味するにすぎなかったが、後にはそれとともに非常に高い政治的官職、宰相の位と結びつき、そのつどの所有者はその官職を自分自身の一族の権力の拡大に利用した。自分の側から、最高権力をわがものにしようという試みもなされた。けれど

も彼らはいつも失敗し、野心的な一族は滅亡することになった。「連」や「臣」の権力志向はたがいを損なったばかりでなく、国中を大きな争いに導くことになった。敵対関係は先鋭化し、「臣」の家族¹が552年頃韓国から導入した仏教に帰依すると、「連」たち²は伝統的な宗教に忠誠を誓った。

もともと日本人は自然力を神的な存在として敬う。例えば、太陽を天皇家の先祖ともみなされている天照大神として敬っている。けれどもそれとならんでしだいに祖先崇拜も始まる。家族の長は死ぬといずれも神として尊敬される。どの家族もみずからの先祖を神とみなす。すべての日本人は共通して、さまざまな天皇や有名な英雄を神として崇拜する。先祖を称えるために毎年盛大な祭りが行われる。これらの日々には、先祖がふたたび地上に帰ってくると信じているのである。こうした祖先崇拜は神事に表れており、神事は今日でもいわゆる神道に受け継がれている。

古い神事と並んで、「臣」によって受け入れられた仏教も勢いを増してきた。仏教の拡大は、「臣」が「連」との争いに最終的に勝利することで促進された。「臣」が勝ったことで「連」の宰相職は奪われ(585年³)、「臣」の頭である蘇我氏はいっそう権力を強めることになった。

戦闘日誌（3）

9月4日 激しい雨。

9月5日 敵の水上機初めて飛来。

9月6日 日本軍飛行士、飛行機格納庫に爆弾投下。5日に日本軍が竜口に上陸したとの連絡あり。

1 蘇我氏

2 物部氏

3 正確には、蘇我氏が物部氏を滅ぼしたのは587年

- 9月13日 プリューショー中尉が長い偵察飛行を行い、銃撃を受けた。
即墨付近で初の偵察戦。
- 9月14日 日本軍飛行士、沙子口を射撃。日本軍の戦力と進撃について
の詳細連絡。
- 9月16日 沙子口、初めて海上から砲撃される。日本軍、膠洲を占領。
- 9月17日 流亭（第3海兵大隊第5中隊40名、クレーマン少佐）付
近で偵察戦。
- 9月18日 流亭の窪里付近で前哨戦（男爵フォン・リーデゼル・ツー・
アイゼンバッハ予備少尉戦死）、河東峠に後退。柳樹台保
養院（Mecklenburg-Haus）を破壊。
- 9月19日 日本軍河東峠から柳樹台保養院を砲撃。ツェツィーリエ橋
をみずから爆破。
- 9月21日 新たな日本軍飛行機の爆弾が大港に着弾。
- 9月22日 クレッター峠まで前進した日本軍は1時間の戦闘の後退
却。ポロハウスは爆撃によって損傷。
- 9月24日 クレッター峠が敵に占拠される。飛行士は、あちこちに爆
弾投下。
- 9月25日 沙子口、海上から砲撃される。
- 9月26日 宅科の橋は爆破された。昼ごろ敵の大軍が白沙河から接近、
1歩兵旅団と3野戦砲大隊によって2時に相口高地を攻撃。
わが軍は、2台の機関銃を持った海軍東アジア分遣隊第2
中隊、海軍野戦砲兵中隊の第3小隊、第3海兵大隊の第5
中隊が応戦。

われわれのチェス・トーナメント

先週火曜日に始まったチェス競技は、どうやら予期しなかったような関心を巻き起こしているようである。所内のほとんどすべてのチェス好きが競技に参加したばかりでなく、好きでない人もとても緊張して試合の経過を見守っている。そのうえわれわれのすばらしい競技が、一連の新しい若者に受け入れられていたことが明らかになった。— 公示したとおり参加者はくじ引きで4つのグループを作り、それぞれをレフェリーが取り仕切った。競技は所によっては本当に面白い試合が行われた。ときおり、やや「緊張しすぎ」が見られたが、それはとりわけ悪手につながったかもしれない。けれどもこうした騒ぎは、競技がくり返されるうちになくなった。そのような意味では本選になる前に、あまり重要でない決定戦が行われたのは本当に幸運だった。本選には、これらのあまり訓練されていないグループからはわずかしこ進めなかった。下にグループ競技の結果を紹介する。本選のファーストクラスでプレイした競技者の名前には下線を引いておいた。これまでの競技を見たところでは、ファーストクラスの決勝戦はたくさんのすばらしい試合が展開されよう。けれどもセカンドクラスでも激しく競り合っている。本選の競技は4月26日月曜日の6時半に始まる。お願いしておきたいのだが、本選の際には招待者も観客もお静かにしていただきたい。

第1グループ	第2グループ	第3グループ	第4グループ
1. レンケル	1. オッフアーマン	1. ドーベ	1. ヴィーザー
2. J. ヴェーバー	2. エーベルツ	2. マイヤー	2. シロ
3. Fr. ヴェーバー	3. シュトウーベン	3. ヘルムート	3. ドロステ
4. ベーマー	4. ベーニヒ	4. シンメル	4. ハウン
5. プリンツ	5. ローデ	5. ヘンツエ	5. ピーチュ
6. ベクマン			

第5問

白：Kd1; Td7, e2; Lb4; Sc5, e5; Ba7, d5, f4, g2

黒：Kd4; Da8; Th6; Bb5, c4, c7, e4, f5, g3, h5

スポーツ

サッカーとファウストバルは、これまで唯一実際に行われてきたスポーツである。もちろんこの点では、われわれの収容所はあまりにもチャンスが少なすぎた。それでもわれわれは、陸上競技の選手が少しでも活動できるようにと努めてきた。限られた空間ではあるが、まちがいなくバラックや哨所の裏に、跳躍や棒高跳びにまで使える跳躍コースを作ることができる。特別に必要な砂を絶えず運ばなければならない。そうすれば跳躍場は、ファウストバルに参加できないスポーツ好きに活動の機会を与えることになる。

他の問題もある。所内にはきっと、かなりの数のかつての体操選手がいる。どのようにして一緒に徒手体操をすればよいのだろうか？確かに一人二人は「収容所体操連盟」の指導者になることができよう。体操はまさにとりわけドイツ的なものであり、確かにすべての「年輩の」体操選手の育成に取りくまなければならない。規則正しい身体訓練は、この強制された休息の中では二重の意味で必要である。それに入用な時間はたっぷりある。今述べたことを実行してみようという人は、誰でも編集室にご連絡下さい。

公演の夕べ

今夜また、次のようなプログラムで「公演の夕べ」が開かれる。

1. 神・皇帝・祖国 合唱、オーケストラの伴奏付き
2. 兄弟への挨拶 詩 コンラート・ニース
3. 戦闘前夜のドイツ戦士の夢 ハンゼン・カルテット
4. われわれと世界 詩 H. H. エーベルス
5. 1814 年のパリの入場行進曲
6. イギリスに対する憎しみの歌 詩 エルンスト・リサウエル
7. ラデツキー行進曲
8. ヒネンボルク⁴ 低地ドイツ語の詩
9. ケルナー⁵ 「戦いの歌」 合唱
10. パントマイム
11. ルフ「ロイターの嘘」
12. 不愉快な取り違え

登場人物

騎兵大尉	フォン・クノーベルスドルフ
少尉	フォン・キュメルブラット
衛兵長	ガウル
キュメルブラット少尉付従卒	ヨハン
御者	シュパンハーガー

場所 キュメルブラット少尉の居間。

この夕べが特別な意味をもつのは、われわれの新しい舞台が初めて使われるからである。募金のとても大きな成果によって（それは 50 円以上にも達した）、ほんとうにりっぱな大舞台を作ることになり、何日か前から

4 おそらくパウル・フォン・ヒンデنبルク（1847 — 1934）のこと

5 テオドール・ケルナー（1791 — 1813）

もうわれわれの芸術家がフロアや塗料や布壁の作業をしとても順調に進んでいる。できればすべてが今晚までに終わればよいのだが。

われわれの舞台開きを、時代にふさわしい愛国的な作品で飾ることができればそれにすぎることにはなかった。けれども演出家に尋ねたところ、そんなに早くきちんとした作品を仕上げるのは不可能だった。そのためプログラムの最初の部分に特に重点が置かれることになった。

今回はまず初めにオーケストラの伴奏付きで合唱が、もう一度「神・皇帝・祖国」を歌ってくれる。この曲は戦争が始まったときに、ベルリン王立オペラの総監督がヒュルゼン・ヘセラーの詩に、最初の常任指揮者レオ・ブレッヒの音楽をつけさせたものである。それに詩「兄弟への挨拶」が続くが、これはまちがいなく故国で戦っている兄弟への挨拶として、同じくわれわれの舞台開きにまさにぴったりである。

このほかにもこの夕べはたくさんのすばらしいものが提供される。きっと大きな成果をあげることだろう。

死傷者リスト

元帝国軍艦「シャルンホルスト」のビーバー海軍大尉死亡。

元第3海兵大隊のクリンガー陸軍大尉死亡。

元海軍膠州砲兵大隊第4中隊のフォン・アステン予備役副曹長、ベルギーで重傷。

元海軍東アジア分遣隊、ホルツマン予備役砲兵伍長も重傷を負ったが、すでに回復し前線に戻った。

.....

外国の嘘

奴らにでたらめを言わせるがいい、嘘をつかせるがいい
真実は表情を変えることはない
ロマン語地域が孤立したからといって
われわれの勝利は傷つかない

もう百年も前に
ブリュッハー親父はこんな文句を考え出した。
「敵をしたたかやっつけてやれば
そのうわさは徐々に広まるものだ。」
ルートヴィヒ・ガングホーフアー

シュピーゲル（鏡）

『トクシマ・アン
ツアイガー』
ユーモア付録

まだ取りに来るのかな！

バラックの近く

には、故国への
荷箱用の板切れ

がまだ何枚
か残ってい
るが？



ダーダネルス海峡
「勇気があるなら、入って来い！」

朝の身づくろい

朝早くラッパが寝ている
奴らを休息から起こすと、
私は窓際に行き
みんなの動きを眺める。
きれい好きなのはいつでも
結構なことにちがいない。
しかし、眼前の様子は
口にすることもできない。
本当にもうめちゃくちゃである！
床には洗い桶があり、
ドアや階段や廊下には
水が撥ね返り濡れていて、
押しのけても通ることもできない。
そのこの片付けが終わっても、
中庭で水が無遠慮に撒かれ、
まさに無作法そのものである。
考えてもみな、日が射すと
ほかの物のほかに蚊までが出てくる。
そうなると笑っているわけにはいかない。
それに洗った後のこんな様子を見ると、
印象は全然よくない。
みんなが行き来している場所は
汚らしい水溜りだ。
だから読者よ、銘記してほしい。
家でやるように洗ってくれないか。
洗い場はいったい何のためにあるのだ。
見栄でないのは、まちがいない！



けっして笑わない男

ロンドンの通りでよく見かける
ロンドンの小路でよく見かける
イギリス中でよく見かける
誰でも知っているその姿を

ポスターでも広告でも
破風でもバルコニーでも
どこででも君を見かける
この偉大なイギリス人！

もう何年も前、イギリス人が
哀れなボーア人を虐待したとき
あのいかさまを始めたのが
このえらい男だった。

今彼は鳴り物入りで宣伝している
空騒ぎのためのばか者を求めて
そして彼の像は誰にでも呼びかける
「あなたがほしい」のだ、ブリタニア人よ
私について来いと！

心も気持ちも顔つきも
時間がたつにつれ頑なになっている
みんながこの紳士について言っている
笑うのを見たことがないと

というのもこの戦争で明らかになったから
彼に何ができ何をしているのかが
だからよく理解できる
彼には笑う必要のないことが

